（二〇一七年度）

2 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は19ページ、三問である。）

受験についての注意

一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
五、**解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
七、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章は、ケア（他者が自己実現し成長するのを助けること）について書かれたものである。これを読んで後の問に答えよ。

不動であり、一般的にその人の生き方と結びついている〝場の中にいる〟ということの中には、ある安定性がある。それは一時的なものではないし、あれこれの特定の状況にのみ関連しているのでもない。私は自分の生活の中で落ち着いてその中心にいるのであり、こうした安定した基盤とは調和しないような日々の生活経験があっても、それはすぐに同化されてしまう。そうした一般的な安定性というものは、かなりのストレスに対抗し得るし、専心と同じように、困難を克服することによって強化されるのである。それは、統一的な目的や目標を持っていること、私たちが実際はそうでないのにその振りをしたいという欲求に打ち克つこと、あるいは私たち自身の価値についての適切な感覚を持っていること――そういう事柄から生じてくる自分たちの根本になるもの、ゆるぎないものに似ている。[1]この安定性というのは、ジレンマに陥って成りゆきまかせのような状態にあるとき、いったい私たちは何者なのか、何をしようとしているのかと考えるときの、心の奥深くに存在する不確実性とは正反対のものである。またそれは、基本的に不確実性を背景にしているような、狂信的な見かけ上の確実性とは根本的に異なったものである。この状態とは、いわば私たちが床の上に寝ているようなものなのであって、もはやベッドからころげ落ちる心配がないといった心境なのである。

この安定性を[2]基本的確実性と表現したとしても、それで真実をつかんだとか確かな知識を持っているといえるわけではない。またこれを、何かの権威や信念にすがりつくことから生ずる確実性の感覚とも混同してはならない。基本的な確実性というのは、岩にしがみついているような状態というよりも、世界に根をおろした状態といったほうが当っている。こうした状態のおかげで、私たちは開かれた存在として他を受容できる状態にある。それに対し、あるものにしがみつくことは、新たに経験することに対して自分自身を閉ざしてしまい、いったい私たちは誰に、あるいは何にしがみついているのか、その確信が持てない状態にする。私たちは、何か重要な個人的利害関係を持つ事柄の中で、否定的な匂いのあるものについては、しばしば

これを無視しようとする傾向がある。そのようにして私たちが、直面することと、自分自身に正直であることから逃避することによって得ようとする確実性というものは、[3]さきの基本的確実性とは何の関係もないのである。

今あることやこれから起こることについて、絶対的保証を得たい気持や、それらについて確信したい気持からむしろ卒業することを、基本的確実性は求める。それどころか、もし基本的確実性が根本的な保証を含むと私たちが考えるならば、それは私たちが傷ついたり、保証を得ようとする思い込みを捨て去ったりすることをも含むのである。

ケアすることが中心にある生の安定性は、継続性のあるものであって、静止しているようなものではなく、一度獲得すればそれで変化しないというものでもない。また[4]基本的確実性というのは、危険をはらんだこの世界で、かきみだされず、平静を保っていこうと禁欲的な決意をするような人の内側には存在し得ないのである。実際、この基本的確実性は、ある人が他者に関与するときの特定の方法に結びついているので、この基本的確実性がいかなる個人にもあるといえるのは、単に派生的かつ抽象的な意味においてだけである。私としては、より意義深く人生にかかわることによって自らを支え、存続させていくのである。もし私の生の意味を生きることが他から阻まれるならば、基本的確実性も妨げられるのである。

[5]私と補充関係にある対象によって必要とされている、という事実からくる帰属感を深く身に感じとると、その経験は私を根底から支えるのである。これこそ基本的確実性の一要素なのである。私は自分と補充関係にある対象によって必要とされているがゆえに、また、いわばこうした対象が自分自身にゆだねられているがゆえに、私には帰属感がある。誰からも、あるいは何物からも必要とされていない人は、帰属感も持ち得ないし、あたかも風に吹かれる木の葉のように生きているのである。私には他者から必要とされていることが必要であり、他者が私を必要としていることと、私にとってそういう他者が必要であることとは密接に関係している。この意味において、帰属感は自己実現とともに成長するのであり、それは私自身の全人格的統一性を私が失ってしまうような、一方的な病的依存状態とは全く異なったものである。

[6]内面と外面との統合が、基本的確実性のもう一つの要素である。私が〝場の中にいる〟ときには、自認する価値と実際の生き方、自分の考え方と実際の生き方、私が自分の行動を内面からどう見ているかと、他者が外側からそれをどう見ているか——

これらの間には理解できる収斂点が存在する。私の実際の生き方が、私が何を価値としているかを裏づけている。内面的なものと外面的なものの間に大きな差が出てきて、それが重大なものになってくると、私の行動は統一的とはならない。つまり、私は自分自身が分断され、結局のところ、いったい私は何者なのか、何をしようとしているのか、確かでなくなってしまうのである。

混乱の要素を大かた排除することによって、私たちは基本的確実性の中に明澄性を発見する。ケアを中心として生を再創造することにより、私の生の中に単純化が生まれる。私のケアと相容れない多くの不適切なものが排除されると、私は自分自身が何者なのか、何をしようとしているのかについて、[7]根本的な明澄性を獲得するのである。この明澄性は、たとえば地位などにかかわることをやめ、そのかわりに自分がほんとうに興味を感じた事柄に没頭することにより、はじめて獲得できるものである。またそれは、自分が真に欲しているものは何であるか、それを手に入れるにはいかなる手段が必要かを認識し、自分がそうでないのにその振りをするようなとらわれから全く自由になることによって、獲得できるものなのである。混乱の要素が排除されるとともに、生きることに複雑なものが少なくなる。すなわち、出来事の間にある重要な関係がずっとはっきり見えてきて、実経験の意味が即座に理解されるようになる。そこには、生きていくうえでさらに重要な直接性が存在し、そして真に意味的に重要なものが明確に浮かび上がる。このような明澄性がなければ、ゆるぎない安定性ということはありえないのである。

混乱・雑然というものは、そのままでは新しい可能性を生みだす妨げとなるばかりでなく、私をうんざりさせ心を曇らせるので、自分の目の前にあるものに焦点を当て、すでに前からあるはずの可能性を認識するのに妨げとなる。たとえば作家が、一度にあまりにも多くの概念をたてて仕事をしようとして、動きがとれなくなってしまう場合がある。さまざまな概念が互いに干渉し合うからである。現在直面している問題に直接関係のある事柄に限ったときはじめて、こうした概念の[8]〝間〟にある意味が伝わるに十分な時間的・空間的ゆとりが生まれ、その間に存在する重要な関連性がわかってくる。先に述べた混乱が、私の〝生活の空間〟を狭め、自由に行動するのを妨げるのに対して、私にとって根本的な事柄に基盤をおいて単純化をすすめて

いくと、それは私の生活空間を拡げ、私自身を解放するのである。その結果、生活に浅薄さではなく深遠さが加わり、時間や空間がより拡がったように思え、想像力をより大きく働かせることが可能となり、新しい可能性が生まれてくる。そこで、自分のしていることが見えはじめ、一つのことに対し自分の心を集中させることができ、そのことと自分の関係をさらに発展させることができる。先の混乱を一種の騒音のようなものと考えるならば、いわば音が静まるように、単純化や基本的確実性によるあるおさまり方があるのである。

自己の生の意味を生きることを述べたときに説明したのと同様に、基本的安定性を確立することを第一に重要であると考え、ケアすることを、それに至るための単なる手段と見なすことは、両者に根本的な混乱をひき起こす。そのようなやり方で私たちがケアの相手を扱うときは、ケアを妨害し、基本的確実性を成就不可能にしてしまう。私たちは基本的確実性を確立するためにケアするのではなく、ケアを中心にすえた生がこの安定性を持つのである。結局のところ、この種の安定性は、それを獲得しようと努力することさえ忘れ、そのかわりに、私たちを必要としている他者に自分自身を深くかかわらせることによって、はじめてやってくるのだといえよう。

（ミルトン・メイヤロフ著・田村真他訳『ケアの本質』）

問一　傍線部1の「この安定性」とはどのようなものか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　特定の目的や目標へと専心しているときに感じる、自分の生き方への絶対的自信。

b　たとえ何が起ころうとも自分の場は安全だという、強固な確信を感じている気分。

c　事態の推移に自分の身をゆだねているときの、不安を忘れて心が澄みきった心境。

d　不安定な状況が起きても、自分の基本的な生き方が混乱せず落ち着いている状態。

問二　傍線部2の「基本的確実性」が成立している状態として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　個人的な事柄の中で何を重視すべきかが前もってわかっている。

b　現実の出来事や新たな経験を偏見なしに受け入れる心構えがある。

c　絶対的保証への期待や確実性への思い込みを捨て去っている。

d　自分の身をゆだねられる強い信念や確実性の感覚を持っている。

問三　傍線部3の「さきの基本的確実性」とはどのようなことから得られるものか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　知識や利害関係などから自由になり解放されること。

b　確実に頼ることができる真理や知恵を持つこと。

c　自分を隠さずにさらけ出しつつ他者を理解すること。

d　自分に不都合な事柄を離れて安心感を得ること。

問四　傍線部4について、「基本的確実性」が「禁欲的な決意をするような人の内側には存在し得ない」ことの理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　その確実性は、個人の中に一般的にあるのではなく、他者へのかかわりから派生的に生じるものだから。

b　その確実性は、つねに他によって脅かされたり阻まれたりするという危険をはらんだものであるから。

c　その確実性は、変化のない世界の中で平静な状態を保ちたいという一般的な願いの対象でしかないから。

d　その確実性は、世界に働きかけることで自らを支えていくという方法でしか得られないものだから。

問五　傍線部5において、「補充関係にある対象」とは、著者によれば、私に関係し、私を完成させるきっかけとなる他者のことである。これをふまえて、ここでの「帰属感」の説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　他者によって私が必要とされることによって、その他者とかかわる場所が自分のいるべき場所だと感じられること。
b　他者によって私が必要とされ、私が他者を必要とすることによって、共通な場ができているような気がすること。
c　私が他者によって必要とされ、頼られていることから、私が自由に活躍できる場所があるように思えてくること。
d　私が他者によって必要とされ、頼られることによって、私が私であるということに自信を持てるようになること。

問六　傍線部6の「内面と外面との統合」の説明として、適切でないものを次の中から一つ選べ。

a　自分の価値観と他者の価値観との一致
b　自分の行動と自分の価値観との一致
c　自己評価と他者による評価との一致
d　自分の行動指針と現実の行動との一致

問七　傍線部7において、他者へのケアによって獲得される「根本的な明澄性」とは、どのようなことにかかわる明澄性か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　生活に不要な部分がなくなることで理解されてくる、生きていく上での自分の本音。
b　安定的な生活の場を得ることで思い出されてくる、忘れていた自分の本来のあり方。
c　興味のある事柄に集中することで生じてくる、他のものにとらわれない自分の自由。
d　統一的で単純化された生き方を選び取ることで見えてくる、自分の生の本来の意味。

問八　傍線部8の「概念の〝間〟にある意味」の説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　ある事柄と別の事柄との関係が有する可能性。

b　ある出来事が含んでいる他の出来事との相違点。

c　生活における一つのことと他のこととの関連性。

d　ある概念と他の概念とが明確に区別される基準。

問九　傍線部9の「私の生活空間を拡げ、私自身を解放する」とはどのようなことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　混乱し雑然とした生活態度をあらためることで、自分がほんとうに必要とするものが見えてくること。

b　生活の原理を単純化し明確なものとすることで、かえってより大きく深い生活が獲得されてくること。

c　目前のことに集中する生活態度をとることで、あいまいだった自分自身の可能性が明確化してくること。

d　ゆとりのある生活態度で仕事をすることで、現在の問題の重要性や今後の見通しが理解されてくること。

問十　傍線部10のようにすることで「安定性」が「はじめてやってくる」と言えるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　ケアの相手に安定性を与えようとすればするほど、さまざまな手段を講じる必要性が出てきて、対応の方針が複雑化してしまうから。

b　さまざまなケアの手段を講じれば講じるほど、かえって生活態度が複雑になり、相手の心理的な安定が得られなくなってしまうから。

c　他者をケアすることに集中せず、さまざまな手段や目的の達成度などばかりを気にしていると、相手との関係が落ち着かないから。

d　基本的確実性の確立のみを目的としてしまうと、当面の相手をケアするために必要な手段を考えることが後回しにされてしまうから。

問十一　本文で述べられている「基本的確実性」の内容として、適切でないものを次の中から一つ選べ。

a　自分の心理的安心感の確立。

b　自分の心の帰属感の獲得。

c　自分の生活の明澄性の獲得。

d　自分と相手の相互理解の確立。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

しのぶの浦の蜑の見るめも所せく、くらぶの山も守る人しげからんに、わりなく通はん心の色こそ、浅からずあはれと思ふふしぶしの、忘れがたきことも多からめ、親はらから許して、ひたふるに迎へ据ゑたらん、いとまばゆかりぬべし。

世にありわぶる女の、似げなき老法師、あやしの吾妻人なりとも、にぎはしきにつきて、「誘ふ水あらば」など言ふを、仲人、何方も心にくきさまに言ひなして、知られず、知らぬ人を迎へもて来たらんあいなさよ。何事をか、打ち出づる言の葉にせん。年月のつらさをも、「分け来し葉山の」などもあひ語らはんこそ、尽きせぬ言の葉にてもあらめ。

すべて、よその人の取りまかなひたらん、うたて、心づきなき事多かるべし。よき女ならんにつけても、品くだり、見にくく、年もたけなん男は、かくあやしき身のために、あたら身をいたづらになさんやはと、人も心劣りせられ、我が身は、むかひゐたらんも、影はづかしく覚えなん。いとこそ、あいなからめ。

梅の花かうばしき夜の朧月にたたずみ、御垣が原の露分け出でん有明の空も、我が身さまにしのばるべくもなからん人は、ただ色好まざらんにはしかじ。

（『徒然草』二四〇段）

問一　傍線部1「しのぶの浦の蜑の見るめも所せく」とあるが、ここには「うちはへて苦しきものは人目のみ信夫の浦の蜑のたく縄」という歌が引かれている。現代語訳としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　信夫の浦の漁夫が人目を気にしないで、海藻を所狭しとたくさん並べているように

b　信夫の浦の漁夫が人目を気にしながら、恋人のもとへ通いつめているように

c　信夫の浦の漁夫が採取する海藻のように、いつまでも逢えないのが苦しくて

d　信夫の浦の漁夫が採取する海藻ではないが、人目を忍ぶ恋が気づまりで

問二　傍線部2「くらぶの山も守る人しげからんに」とあるが、「暗部山（くらぶ）」は鞍馬山のこととする説が有力で、暗い闇のイメージが強い歌枕である。現代語訳としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　鞍馬山の闇の暗さを大切に守り続ける人がたくさんいるのに
b　鞍馬山のように暗い闇夜でも、監視の目が行き届いて安心なので
c　暗い闇夜に紛れて逢いに行こうにも、見張りが厳しくて難しいのに
d　世の中は鞍馬山の暗い闇のようではあるが、見守る人もたくさんいるので

問三　傍線部3「いとまばゆかりぬべし」とあるが、なぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　鞍馬山の闇に目が慣れていたのに、昼間の光は明るすぎて目がくらむようだから。
b　結婚するまでの過程を楽しんでいたのに、家庭に入ったら毎日がつまらないから。
c　困難を乗り越えて結婚したはずなのに、新婚生活はこれからが大変そうで不安だから。
d　反対を押し切って無理に逢うのが感動的だったのに、許されるとかえって決まりが悪いから。

問四　傍線部4「にぎははしき」とあるが、どのような男か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　経済力豊かな男
b　世間で評判高い男
c　陽気で明るい性格の男
d　身分が高く教養ある男

問五　傍線部5「誘ふ水あらば」とあるが、ここには「わびぬれば身を浮き草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」という歌が引かれている。どのような意味になるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　私と一緒に旅行をする気があるならば、そうしたい。
b　私と結婚する気のある人がいるならば、そうしたい。
c　私にお店を持たせてくださるのならば、そうしたい。
d　私の最期を見届けてくださるのならば、そうしたい。

問六　傍線部6「何方も心にくきさまに言ひなして」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　仲人は、どちらにも相手のことをあまりはっきりと伝えなかった。
b　仲人は、どちらにも相手に一目置いて遠慮するよう言いくるめた。
c　仲人は、どちらにも相手が奥ゆかしい人柄であると言いくるめた。
d　仲人は、どちらにも相手と釣り合わないとは決して言わなかった。

問七　傍線部7「知られず、知らぬ人を迎へもて来たらんあいなさよ」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　恋愛関係のないままで結婚しても、うまくゆくはずがない。
b　恋愛関係のないままで結婚しても、うまくゆくことがある。
c　恋愛関係が生じることに興味があり、結婚そのものにない。
d　恋愛関係が生じることよりも、結婚そのものに興味がある。

問八　傍線部8「分け来し葉山の」とあるが、ここには「筑波山葉山繁山繁けれど思ひ入るにはさはらざりけり」という歌が引かれている。どのような比喩となっているか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　恋の相手を選ぶのに苦労することの比喩
b　恋愛の障害が極めて多いことの比喩
c　結婚に至るまでに障害が多いことの比喩
d　人生何であれ苦労が続くことの比喩

問九　傍線部9「よその人」とあるが、前の段落に出てくる誰と同じ立場であるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　世にありわぶる女
b　似げなき老法師
c　あやしの吾妻人
d　仲人

問十　傍線部10「いとこそ、あいなからめ」とあるが、ここからは、著者が人のどういう魅力に価値を置いていることがわかるか。次の中から正しくないものを一つ選べ。

a　出自が高い
b　身分が高い
c　容貌が美しい
d　年齢が若い
e　裕福である

問十一　傍線部11「ただ色好まざらんにはしかじ」とあるが、この段落に物語的な場面を引き合いに出すことで、著者は何を言おうとしたのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　物語を読んで自分と比べたら、物語には真実の恋が描かれていない気がする。

b　物語を読んで参考にすれば、自分にも物語のような恋ができそうな気がする。

c　物語の場面を自分に重ねて読めないような人は、恋には無縁な存在である。

d　物語の場面を自分に重ねて読むような人は、現実的な恋などできないであろう。

e　物語の場面を自分に重ねてたのしめばよく、現実的な恋などしない方がよい。

三 次の文章は、後漢の人、范滂（字は孟博）の伝である。これを読んで後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

范滂遷光禄勲主事。時陳蕃為光禄勲。滂執公儀[1]詣蕃。蕃不止之[2]。滂懐恨、投版棄官而去。郭林宗聞而譲蕃曰[3]、「若范孟博者[4]、豈宜以公礼格之。今成其去就之名[5]、得無自取不優之議也[6]」。蕃乃謝焉。

復為太尉黄瓊所辟。後詔三府掾属挙謡言。滂奏刺史、二千石権豪之党二十余人。尚書責滂所劾猥多[7]、疑有私故。滂対曰、「臣之所挙[8]、自非叨穢姦暴、深為民害、豈以汙簡札哉。間以会日迫促、故先挙所急。其未審者、方更参実。臣聞農夫去草、

嘉穀必茂、忠臣除姦、王道以清。若臣言有弐、甘受顕戮。吏不能詰。滂覩時方艱、知意不行、因投劾去。

（『後漢書』范滂伝）

〈注〉○光禄勲―官名。主事はその属官。○陳蕃―人名。○公儀―上役に対する正式な礼儀。○版―笏。官位ある者が持つ札。○郭林宗―人名。名は泰、林宗は字。○格―正す。○太尉―官名。○黄瓊―人名。○三府―三公（太尉、司徒、司空）の役所。○掾属―属官。○謡言―時の政治を風刺するようなはやり唄や噂。○二千石―太守。郡の長官。○尚書―官名。○叨穢―貪欲でけがれていること。○会日―期日。○顕戮―見せしめのため死刑にすること。

問一　傍線部1「詣」、3「譲」と同じ意味を持つ漢字を、次の中からそれぞれ一つずつ選べ。

1　a　祈　　b　至　　c　談　　d　申

3　a　諭　　b　渡　　c　尊　　d　責

問二　傍線部2「蕃不止之」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　范滂がわざわざ挨拶にやって来ているのに対して、陳蕃は仕事をやめて応対しようとしなかった。

b　范滂が陳蕃に、不適任だから光禄勲を辞するよう忠告しに来たのに、陳蕃はやめようとしなかった。

c　范滂が公的な礼儀作法で自分に接してきたのに対して、それには及ばないと止めてやらなかった。

d　范滂がせっかく手にした官職を棄てる決意を告げに来たのに、引き止めようとしなかった。

問三　傍線部4「豈宜以公礼格之」の書き下し文としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　あによろしくこうれいをただすにこれをもってすべし。
b　あによろしくこうれいをもってこれをたださんや。
c　あによろしくもってこうれいをこれにただすべきか。
d　あによろしくこうれいをもってこれをただすべけんや。

問四　傍線部5「去就之名」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　自分の誇りを守って身を処したという良い評判。
b　ささいな礼儀にまで口うるさいという悪い評判。
c　役人としての出処進退を誤ったという悪い評判。
d　もめごとの種を未然に排除したという良い評判。

問五　傍線部6「不優之議」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　部下よりも実力が劣っているのではないかという批評。
b　部下の遇し方が粗略に過ぎるのではないかという批評。
c　他人に対する思いやりが不足しているのではないかという批評。
d　礼節を重んじるような上品さに欠けるのではないかという批評。

問六　傍線部7「尚書責」の理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　多数の権力者を弾劾することが、自分たちの政治的立場を危うくするのではないかと恐れたから。

b　多数の権力者が弾劾されたのは、范滂の間違った判断によるものが含まれているためではないかと危ぶんだから。

c　弾劾の対象者の数があまりにも多く、個人的なうらみによるものが含まれているのではないかと考えたから。

d　弾劾の対象者が予想以上に多いため、その中に自分たちの旧知の人が含まれているのではないかと懸念したから。

問七　傍線部8「自非叨穢姦暴、深為民害」に返り点を施した次の選択肢の中から、もっとも適切なものを一つ選べ。

a　自レ非三叨穢姦暴、深為二民害一

b　自レ非二叨穢姦暴一、深為二民害一

c　自非二叨穢姦暴一、深為レ民害

d　自非二叨穢姦暴、深為レ民害一

問八　次の中から、本文の内容に合致するものを二つ選べ。

a　陳蕃に対する范滂の態度は極めて非礼なものであったが、郭林宗は彼の才を惜しみ、陳蕃をなだめた。

b　陳蕃は、郭林宗の助言をありがたいとは思ったが、范滂を許す気にはなれなかった。

c　范滂は、自分が行った弾劾の内容について、期日に間に合わせようと急いだため不備があると認めている。

d　民を苦しめ、私利を貪る悪徳官僚は、言ってみれば作物の生育を妨げる雑草のようなものである。

e　自分が行った悪徳官僚の告発に、万一あやまりがあった場合には、范滂は死を以て罪を償う覚悟でいる。

f　自分が行った告発が認められたことを知るや、范滂は民衆の苦しみを救うため、朝廷を立ち去った。